



リレー随想

グローバルの多様性を活かし、日本に貢献する

マイラン製薬株式会社
代表取締役社長 ランディー・スタインロフ

今年も様々なドラマを生んだプロ野球シーズンが終了しました。アメリカ出身の私は、ご想像どおりメジャーリーグファンです。昨年は私の故郷、イリノイ州シカゴをホームとするシカゴ・カブスが108年ぶりにワールドシリーズを制するまで、ほぼ毎試合の結果を追っていました。アメリカ国内のファンのみならず、私のように海外に住むファンまで熱狂させてくれましたが、今年は残念ながらナショナルリーグチャンピオンシップシリーズで敗退しました。そして今年のワールドシリーズでは勝敗そのものより話題になった出来事

がありました。ヒューストン・アストロズのユリエスキ・グリエル選手が、ロサンゼルス・ドジャースのダルビッシュ有投手に対して誤解を招くような行為をし、世界中で非難の的となりました。しかし周囲の炎上ぶりとは裏腹に、ダルビッシュ投手のコメントは、「これによって世界の人々がまたひとつ習って、また全世界の人間として、また一歩前に進めたら、結果的にはいいことになるんじゃないかなと思います。」と非常に冷静かつポジティブなもので、これには私たちが学ぶべきところがあると思いました。

マイランは、165の国や地域で製品を販売するグローバル企業です。世界中にいる35,000人の社員は人種も様々で、その顧客もまた然りなので、多様性の尊重は日常的に実践されています。それは性別についても同様です。マイランCEOのヘザー・ブレッシュは製薬業界においてはもちろん、アメリカ全体でも数少ない女性CEOの一人であり、Fortune誌やその「最も影響力のある女性リスト」の常連です。マイラン製薬でも女性管理職の割合が30%以上と、日本政府が2020年までに達成目標として掲げている数値にすでに到達しています。

日本のマイラン社員も国内外で様々な人たちと、日々協働しています。当社では「CCC」、すなわち互いに連携し(connect)、協力し合い(collaborate)、コミュニ



ケーションを強める（communicate）を常に念頭において、業務を行っていますが、特にグローバルにおけるCCCの実行には、当社の公用言語である英語の習得はもちろん、相手の考え方や文化的背景などに対する幅広い理解が必要となります。日本には日本の商習慣があるように、それぞれの国にユニークな商習慣があります。各国で事業を潤滑に行うためには、その国の社員や顧客の文化や習慣を学び、その違いを受け入れなければなりません。それは業務内のことにとどまりません。たとえば海外からの出張者がいる場合、ランチひとつとっても、食習慣や宗教が違えば食べられるものも異なり、メニュー選びに注意しなければなりません。それも手間と思えば面倒ですが、ダルビッシュ投手の言うように新しいことを学ぶ機会だと思えば、一歩先に進め、次にはそれが習慣になります。

業務上の事項のみならず、相手の生活習慣や文化まで理解して仕事をするのは、容易なことではありません。しかしそれが結果的には相手を尊重し、お互いに学び、仕事の効率化につながることは、経験上よく知っています。また当社の最高の資産は人材であり、長期的なビジネスの成長には、国籍に関わらず世界中で優秀な人材を採用・維持することも優先事項の一つと考えています。マイランでは社員全員が、世界70億の人々に高品質な医薬品を届けるという壮大なミッションのもと、多様な同僚たちと協力しながら日々の業務を行っています。マイラン製薬では日本に住む約1億2千7百万の人々のため、今後もグローバル企業としての強みを活かしつつ、日本の商習慣やニーズを十分に理解した上で、日本のジェネリック医薬品業界にさらに貢献していく所存です。